

平成30年度 青少年問題調査研究会 第1回議事録

日 時：平成30年10月9日（火）14:00～16:00

内閣府政策統括官（共生社会政策担当）付青少年企画担当

司会 それでは、時間になりましたので「青少年問題調査研究会」を開会いたしたいと思います。皆様、本日はお忙しい中、お集まりいただきましてありがとうございます。

内閣府の青少年担当では、有識者や実務家の方から子供・若者に関する最新事情を御講演いただく、「青少年問題調査研究会」を開催しております。この研究会では、現代の青少年が置かれた多様な状況を反映して、健全育成、育成支援等、多岐にわたる分野の問題・課題をテーマにし、そのテーマに精通されている大学教授など有識者の方々やNPOの活動家の方々などをお招きしてお話をお伺いしております。

今回は本年度第1回目の研究会といたしまして、中央大学文学部教授 古賀正義先生を講師としてお招きしております。

古賀先生は教育社会学を専門とされておられまして、青少年問題と支援活動の調査研究などを主なテーマとして研究をされておられるほか、内閣府子ども・若者育成支援推進点検・評価会議構成員、東京都青少年問題協議会副会長などの数多くの公職を歴任されております。

また、数多くの著作・論文等も執筆しておられ、その一部が本日の配付資料の末尾に掲載されておりますので、ぜひ御参考としていただければと思います。

本日でございますが、「生きづらさを抱える若者の社会的自立に向けた支援について」と題しまして、不登校、いじめ、高校中退、非行など、様々な生きづらさを抱える若者を取り上げ、私たちの関わり方の在り方などについて御講演していただく予定でございます。

それでは、先生、どうぞよろしく願いいたします。

「生きづらさを抱える若者の社会的自立に向けた支援について」

中央大学文学部人文社会学科教授 古賀 正義氏

古賀氏 御紹介いただきまして、ありがとうございます。古賀と申します。よろしくお願いいたします。

今日は1回目ということで、1回目というのは非常に責任が重くて、最初が上手くないと後が続かないというのが大体ありますから、任を果たせるかどうかはともかくとして、口火を切れるようなお話をさせていただければと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

また、今日は途中でビデオクリップも見ていただいたりするので、その際は大変恐縮ですが、ただ座っていても眠くなってしまうたりしますから、御参加いただけるとありがたいなと。見た感想とか、レスポンスをいただけると、やりとりしながら確認できることもあるように思いますので、もしマイクが当たったら、恐怖心を持たずに、逆に積極的にお話しいただけたらうれしいと思います。よろしいでしょうか。

ということで、冒頭から何か挑発的に聞こえるのかもしれませんが、そうではなくて、今日お話ししていく若者のこと自体が、我々のようなジェネレーションにとってはとても縁遠かったり不可思議な要素を感じるものですが、恐らく今の若い人たちにとってはごくごく当たり前の感覚を確かめる作業になるかと思っておりますので、もちろん若い方もいらっしゃるでしょうけれども、そうでない方もいらっしゃるのので、ぜひ確認しながら進んでいきたいなと思います。

お手元にパワーポイントの資料をお渡ししまして、これに従ってお話ししていきます。今日は大分長い時間をいただいているのですが、とはいえ、全部は読み切れないということもありますので、部分部分をかいつまみながら、ポイントになるところをお話ししていこうかなと思っております。

ちょうど今年の6月頃なのですけれども、先ほども御紹介いただきました東京都青少年問題協議会、一般に「青少協」と略しているかと思っております。この意見具申が出ております。第31期の具申ということで、ここに書いてあります、「生きづらさを抱える若者の社会的自立に向けた支援体制」ということで、東京都でつくったものがホームページにも載っております。

実は、この第31期のとき、いわゆるまとめ役になっていたのが私でして、私が大分意見を言って修正していただいた部分がございます。これを今回は、プリントの中に入れてこなかったのですけれども、後でダウンロードできますので見ていただきたいと思います。今日のお話ともかぶってくるが多々あります。

といいますのは、主にひきこもりの方を中心にした相談支援体制を東京都で構築するための具申をしてくださいということでしたので、東京都は御存じのように、ひきこもりの担当をこの青少年問題協議会が属しています青少年・治安対策本部という、都知事のぶら

下がりの部局がやっております。これは要するに総合的な対応をする部局が直接ないので、やっているわけなのですが、この部署のほうで具体的な策を立てるために青少協に具申を求める形で進めてきたということがあるものですから、できるだけ色々なアイデアを盛り込もうということだったわけです。NP0の方々もたくさん委員に入ってくださいましたし、いわゆる学識経験者だけではなくて、行政関係の方も、警察、法律関係の方、あるいは雇用関係の方も、色々な方に一緒に入ってくださいました。

改めて、この話をしていると長くなりますが、そういう方々の意見を聴取しながら、実はもう皆さん方は御存じだと思いますが、一つは、自画撮り被害防止のために条例を改正しました。

「自画撮り」は御存じですか。未成年の女性の方とかで、よからぬ男性の人とかにリクエストをされて、自分のわいせつな写真とかを送ってしまうというのが自画撮りと言われるものなのです。これは若い人たちが自らの意思で送ってしまうものですから、今までの法の網で対応できないということだったのです。つまり、商品にしてそれを売ることになれば犯罪（児童ポルノ）なのですけれども、その手前のところに網をかけるのは非常に難しいということだったのです。そのために条例を改正するということになりました。

実は、すでに逮捕者が1人出てしまったのです。抑止力にするつもりで改正したのですけれども、現実に逮捕者がもう出てしまっていて、条例自体は、先ほどお話しした相談体制の構築より半期前に改正されたのですが、逮捕者が出てしまったということで、情報化社会の中で若い人たちが犯罪に巻き込まれてしまう一つの例であると思います。

それと、もう一つセットになっていたのが、今、お話しした相談支援体制のほうで、こちらはむしろ性犯罪とか、そういうものとは違って、ひきこもりとか社会参加のできない人のためのものということです。

この第31期ですごく気にしてやったことは、ひきこもりの問題だけ単体として考えるのではなくて、まず若い人たちの「自立」の問題がどういう質のものかを丁寧にトレースすることでした。よく言われるのですけれども、問題だったらすぐに対処すればいいではないかという話が出る。この具申案をつくるに当たって、専門家の多くにヒアリングをした結果として、当事者が問題に気づくのははすごく時間がかかるということがわかりました。特にひきこもりの場合は、やはり5年ぐらいの歳月が要求されていて、それまでは家族にとってもひきこもりだというふうに問題を理解することはほとんどまれだということがわかってきました。

これはつまり、問題の渦中にいても、いつかよくなってくれるのではないとか、それほどの深刻な問題とは読み取りたくないとか、こういう理解が出てしまうのです。つまり、問題だと気がつく段階ですでにかなり深刻になっているということなのです。問題自体が曖昧ではっきりしない段階にも様々な予防的とか対処的なことがとれるような仕組みづくりがないと、問題になったと感じてから出てくるのでは非常に遅れてくるということがわかってきた。

問題をどういうふうに理解して当事者が対応していこうとするかというレベル分け。つまり、問題がまだ曖昧ではっきりしない段階。第2段階としては、どこに相談に行ったらいいか、よくわからない段階。それから、はっきりとこれは問題だというふうに自覚して、より専門家の助言や色々なNPOさんの活動に参加することを求める段階という、3段階を置いて、それぞれに対応するような方法論を模索するということを行いました。

メモしてくださっている方もいるのですが、ちょっと繰り返し言うておきますと、そういうふうになったので、今回の話の結論みたいになってしまうのですが、相談支援体制は、「スクラム連携」という言葉を使って、色々な機関の相互連携が図りやすいような方法論を工夫するという提案をしています。これは内閣府もずっとやっていることなのですが、具体的な地方自治体ではなかなかそれが立ち上がってこなかったのも、もう少し突っ込んでスクラム連携を立ち上げてほしいということをお願いしました。

一つは問題についての情報を共有することと、問題にアクセスするための支援に関するアプリの構築。アプリですと、スマートフォンとかにインストールすると、すぐ、そのアプリから問題対応の機関がぱっと見えるという提案です。これをまず第1段階としてやってほしいということを行っています。

これはすぐできるかどうかという問題はあるのですが、今までのように情報がどこにあるのかわからない。例えば教育委員会のホームページを見て、何らかの相談窓口を探すということが当事者に極めて困難だということがわかったので、アプリを使って、ぱっとインストールさえしてもらえば、そこで問題にしたい事柄を入れると、すぐに幾つもの機関の名称や所在が出るようなものを構築してもらえるように、今、お願いしているところです。

これは先ほど出た自画撮りの問題でもそうなのですが、やはりスマートフォンとかが普及して情報化社会になってきていますので、若い人たちがこういうアプリ情報のところでアクセスすることはしやすい。まずこういう立ち上げが要るのではないかとということです。

もう一つは、御存じの方もいるのですが、東京都は無料相談窓口「若ナビ」というものをつくったものですから、このワンストップ窓口をより整備して、色々な情報の拠点とする体制にするようにということもお話ししました。

それから、もう一つなのですが、ここはすごく大事なのですが、今までと違って人的交流、NPOの人同士の交流や能力開発の場を相互に開いていただくことをお願いしました。これは今まで他業種と見られるNPO相互では話し合ったり、一緒に活動してみたりという機会がほとんどないのです。そんなもので、これをやっていただいて、情報を交換していただくような活動を入れてもらいたいということをお願いしたわけです。

研修は現在いっぱいやられているので、それに相乗りしながら色々な団体が、もちろん、NPOさんだけではなくて、色々な研修施設とか、あるいは相談施設とか、様々な人たちが交流し合っていて、問題について検討できるような、従来よく言われるケース会議みたいな

ものをもうちょっと拡大版にして、やっていけるような方向を提案しています。

もう結論的な話に先に入ってしまったのですけれども、つまり、今までは専門家の方たちの専門分野を生かす、生かし方がなかなか上手くできなかったので、できるだけ当事者の代弁者になるような人を置いたり、あるいは当事者をつなぎをつけるハブ的機能を持つコーディネーターを置いたりして、こういう人たちによって相談が円滑に機能的に動くような、あるいは有機的になるような方法を工夫してみたいということを提案しています。

これは言うは易しいですけれども、行うは難しいことなので、これから実際のことが動いていくかと思うのですが、地域に密着した形でこういう代弁者やコーディネーターになるような人たちがいてくれると非常に円滑に色々な相談に接続できるのではないかとこのように期待しているところなのです。

あくまでも東京都は大きな枠組みで提案しているだけで、実際どうなるかは各自治体の取組に非常に左右されますので、逐次、今後も働きかけていってほしいということもお願いしました。

この話ばかりしていると行政の具申案の理解みたいになってしまうのですが、今、お話ししてきたようなことが必要とされる背景を今日はお話しします。つまり、今、お話ししてきたような相互連携とか、理念的にはそういう問題がわかっていたり、あるいは問題のレベル上げの話もそういうものだと思われること。例えばインテークなどという言葉で問題に入ってくる若者のレベル上げをしたほうがいいということは、ある意味で現場の方々にはよく御存じだと思うのですが、なぜ、そういうことがすごく重要な課題として取り上げられているのかをこれから具体的な問題を取り上げながらお話ししていきたいと思えます。

これから時間をかけてお話ししていきますが、色々な要素を盛りだくさんに持ってきました。というのは、実は私はいわゆる調査の専門家で、色々な調査の場に立たされてきた過去があるのです。もともと、校内暴力が起きる高校のフィールドワークというものが研究者のスタートで、あまり日本ではそういう現場に入って行って、本当に見てくる、観察してくるとか聞き取りをしてくる人は少ないのです。アメリカとかヨーロッパはよくいるのですけれども、日本ではあまりいない。そういうことがスタートだったものですから、その後も逸脱問題の現場に関わる機会が多くなってしまったのです。

見ていただいてわかるように、ちょうど先だって、10月5日でしたか。読売新聞でも取り上げていただきましたが、高校中退の実態・対策というものを、東京都で調査をするので、私がキャップでやらせていただきました。

それから、不登校支援のNPOの調査もやりましたし、ちょっと変わっているのは8番目にある、教育困難高校卒業生の10年間というものですが、これは非常にハードな高校を卒業した人を10年間、ただただとにかく追いかけるというライフコース研究です。こういうものもやってきました。

また、前のほうに出ているようなひきこもり、「生きづらさ」という問題と書きましたが、ひきこもりの調査も東京都に頼まれて、ひきこもりの御家族や本人にも聞き取りをしたりしていきました。

また、一番最後にある少年院にも3年ほど法務省の依頼で通って、院内で調べるという作業もしてきました。

これはたまたまの偶然で、つまりひとつ何かやっていると、そういう経験のある人にもう1回やってもらえないかとなるということの連鎖でこういうふうになってしまっているだけなのですけれども、色々な問題の現場につき合ってきましたので、その色々な問題の背後にあるものをこれから考えてみようと思います。

では、まず、今日の問題の入り口の「生きづらさ」というところから見ていくことにしましょう。

ここにいらっしゃる皆さんは、ある意味で「生きづらさ」を抱えている若い人たちと直接お会いになる方もたくさんいらっしゃるかと思います。

NPOの方はどのくらいいらっしゃいますか。ちょっと手を挙げて。

(挙手する者あり)

たくさんいらっしゃいますね。

行政の方は。

(挙手する者あり)

そうですね。皆さん、では、こういう「生きづらさ」という言葉はよく御存じかと思えます。

それで、2000年代に入ってから、青少年の問題はこの「生きづらさ」ということに集約されるようになってきているのです。

すごく変な話ですけれども、少年院に行って、少年院の法務教官という職員の方から最初に言われたのは、今、非行少年はヤンキーではないですよ。みんな生きづらいのですという話でした。何かテンパっていて、人をぶん殴ってしまうような暴力的な人を探そうと思っても、少年院にもそういう人は余りいないというのです。むしろ、来るとみんな結構、持病を抱えているような人だったりして、悩み事を教官に言ったりするような、あるいは無口で何もしゃべらなかつたりする人が多くて、どうやって生きてきたんだいなどと聞き出すのは困難だということと言われていたのです。

この「生きづらさ」という言葉、生きにくいに決まっているよと言うかもしれないのですが、非常に象徴的な言葉ですね。色々な人が定義しているのですけれども、一言で言うと、社会の中に自分の居場所が見つからないで、将来への展望が描けない疎外された孤立の状態を指すということだと思います。だから、これは自分の存在価値が見出せるような場所がないし、将来にも良いことはなさそうだし、何となく一人ぼっちで生きている。こういうイメージだろうと思うのです。

この「生きづらさ」が起きる原因は、実は多種多様だと思うのです。一言でなんて、と

とも言えませんね。周囲の対人関係があって精神的に生きづらい人ももちろんいますが、家の経済状態が悪くて、貧困で生活苦から生きづらい人もたくさん、今はいます。これは作家の雨宮処凛が書いているのですけれども、一種の「自分病」だと。自分というものが何のためにいるのかわからなくなる状態だというふうに言っているわけです。外に開かれた問題ではない。「自分病」という言葉。これは非常に重い言葉だと思います。自分に問いが向かってしまう。

これはあるひきこもりの方が自伝を書いている、その方がひきこもりになり始めのころの様子をこんなふうには書いています。「自分のことが嫌いになっていく僕は、それから、髪のももボサボサ。・・・普通の人間とみられるよりも、変な人間と思われる方が楽だと感じていました。そして、この生活が日常化されるようになっていき、冬の苦手な僕は家にいる時間も（どンドン）長くなっていきました」と、こういうふうには書いています。

自分のことが嫌いになっていくということ。これはとにかく入り口ですね。変な人間と外の人に思われるぐらいなら、家にいようとなるということですね。こういうひきこもりのプロセスは非常に我々にはわかりにくいです。それこそ、ひきこもりの定義は色々なところでして、内閣府の定義なんかではコンビニぐらいは行ける人となりますけれども、何で家にずっといななければならないのか。どこに問題があるのか。きっと嫌なことがある、原因があるだろうとみんな考えるわけです。

東京都でやったひきこもりの調査をしたときに、一言で言って原因なんて明確にならないなというふうに親御さんの話から思いました。そんなことを言ったら意味ないではないかと言うかもしれないのですが、この後にも示しますように、いじめとか不登校のような学校の問題もあれば、就職や資格試験、職場での体験など就労の問題もあれば、あるいは対人不安とか発達障害とかという精神的な疾患や問題もあれば、どれもこれもが一つの原因で語られることはないのです。ひきこもる人たちは複合的な悩みを抱えている。

これが話の中でもものすごく、例えばここにアンダーラインを引いておきましたけれども、これは1人の方なのです。今はひきこもってしまって、10年ぐらい家の外に出ていない方なのです。ブラインドを下ろして、家の中が見えないようにしている。この方は、最初は学校で、クラスの友達にいじめられたという話が出てくる。これを親に話したのは、ひきこもってから7年、8年経って、いじめられていたのだと言うのです。これは何かすごく変に思うかもしれませんが、親御さんは色々過去を遡って聞こうとするので、色々後日知っていくのです。だから、実は最初から知っていたわけではないのです。こういう話は結構、何年も経って出てくるのです。実はいじめられていた。

さらに、これは親御さんも理解していますね。家庭の中で暴力があった。壁を壊すとか、色々なものを壊してしまうということがあった。そのあげくに、友達に対して何か言われてキレたということがあって、この方は傷害事件を起こしてしまうのです。これは傷害事件といっても、ずっと前から暴力的な人ではないのです。「キレル」のです。瞬間的にキ

してしまう。これは境界性の乖離障害とかという心理学の方もいらっしゃるけれども、親御さんからもよくわからない。なぜキレたか、よくわからないのです。ただ、殴ってしまうのです。殴ってしまって、傷害事件になってしまうのです。色々な損害があったりして、この方は補導されて、少年院にも入ってしまっているのです。

その後、何とか出てきて、知り合いの人の職場に紹介しようと言ったのだけれども、そこでまた孤立したり、色々な方と衝突してしまう。衝突というのは、何でそういう、自分の言っていることを聞いてくれないのだと、上司の方に言われてしまうということです。それでひきこもっていく。

このプロセスが1人の人の大体10年ぐらいの中に凝縮されていると思うと、一体、ひきこもりはどんな問題なのだろう。例えば、もし教室でいじめに遭ったら、この人はいじめ問題の人です。そうでしょう。つまり、問題のどの断面で出会うかによって、この人の問題点は全く異質なものになってしまうわけです。

さらに言うと、ここはすごく難しいことですが、これはそうではないという方もいらっしゃると思うのですが、このひきこもっている方たちは大抵、不登校の延長でこうなっているのだと思われてきたので、これは確認しているのですけれども、この親御さんの調査の結果だけから言えば、3割ぐらいの方しか長い不登校は経験していなくて、もちろん、経験している方もたくさんいらっしゃる。しかし、長い不登校の方はそのぐらいで、それと同じぐらい、例えば卒業論文で失敗した方とか、卒業した就職先で非常に適応が難しかったとか、こういう20代になってから、移行(トランジション)の不安や危機と書いていますが、仕事に就こうとして行ったところでひきこもってしまった人もたくさんいたわけです。ですから、ひきこもりになるきっかけは、我々が考えている学校問題の延長線上だけではないということがわかってくるということなのです。非常に不可解です。

これはそういうひきこもりのキレた事件例なので、後で読んでいただきたいのですが、色々なことが起きるものですから、親御さんもこれは、やはり色々なスパルタ型教育なども求める方もいらっしゃるのです。

後でも御紹介しますけれども、よく親御さん、皆さん言うのですが、「藁をもすがる思い」なのだ。病院も行った、相談機関も行った、あるいはハローワークにも行った。ありとあらゆる場所に顔を出している方は多くて、ありとあらゆることをやっている方ばかりです。10年以上の中では、それこそ頼れそうなもの、可能性のありそうなことは何でもやっている。もちろん、不登校の親の会とかにちゃんと入る方も多いです。そういう方々です。

これは20例、聞き取りをやっていきますけれども、いわゆるNPO関係の団体から入っている方々が10名強なのです。あとはそうではない方もいて、色々な対応があるわけです。

(配布資料7ページ図参照)

これがひきこもりの説明のときに私がよく使っている絵でして、ここに書いているようなことが主たる原因として挙がっているものです。

見ていただくと、不登校で、学校の経験がなくなるとか、それから、いじめの問題。いじめの問題は、実はいじめられるとかいじめるほうの人もいるのです。これは大抵、クラスの中の対人不安ですね。ですから、これはいじめるとかいじめられるというのは、みんな友人関係の困難ということです。

それから、さっき言った職場の不適応みたいなこともすごくあるし、受験の失敗もあるし、それから、女性の方が今回はあまり多くなかったのですけれども、女性の方でなくても男性でもリストカット、拒食症、それから、容姿恐怖。これは顔にきびとかが出るのが怖くて、毎日、外に出る前にファンデーションを塗っていかれる方でした。これはすごく時間がかかって、1時間ぐらいファンデーションでお化粧をしてからでないとい外へ出ない方で、これは容姿恐怖。あるいはオーバードーズ。これは御存じですね。お薬をいっぱい飲んでしまう。大量服用です。これは鎮痛剤が女性の場合は多いですが、男性でも風邪薬とかの大量服用とか、薬物依存と言うとちょっと言い過ぎなのですが、やはりお薬を使うケースは結構多いです。これはもちろん、精神的な病からくるお薬という場合もありますけれども、それだけではないのです。こういうものを「実存への不安」と書きましたが、自分が生きていることへの不安を絶えず言ってくるというケースです。

それから、暴力・非行という反社会的行動。あるいは逆に、虐待を受けたという被虐待経験。こういうものもまた出てきてしまうのです。親御さんは、例えばお母さんのお話を聞くと、お父さんが殴ってしまったとか、乱暴な人だとか、お母さんの側からはお父さんの問題性が言われたりして、逆もあるのです。お父さんに聞くとお母さんの問題性が言われたりして、なかなか難しいです。同じ御意見にはならないです。ですから、こういうものもこちら側に出てきます。

何といっても重要なポイントとしては、その下の部分にある精神疾患とか発達障害の問題。これは誤解なきように言っておくと、御本人の発達障害ももちろんありますけれども、親御さんの問題でもあるのです。親御さん自身の中にもこういう問題が潜んでいて、実は家族の中でこういう相互関係、例えば兄弟とかも発達障害だったりとか、それから、親御さんの精神障害のケース。例えばお母様がぶつんとキレて、すぐ怒鳴るというケース。これはお父さんの話で、うちのがぶつんとキレてしまうのですよみたいな、こういうものも出てくるわけです。

ここに出ているようなことは実は、後でお話ししますが、高校を中退する人たちの背景にも同じようなことが出てくるので、スクールソーシャルワーカーの人に今、聞き取りをしてもらおうと、特に今の精神疾患、発達障害ゾーンは家族内の本人ではない人まで、あふれ出してしまうのです。

後でお話ししますが、スクールサポーターという形でスクールソーシャルワーカーを今、80校ぐらいに一気に入れてもらったのです。これは調査した結果として、当時の舛添知事に予算要求したら、億単位のお金がついたのです。それで人が入ったのです。それで入って、やって、聞き取りしてもらっているのですけれども、その情報収集の研修会へ行くと、

とにかくこれがいっぱい出てきた。だから、本人だけの問題ではないのです。相互関連していつてしまっているわけですが、ここに出ているようなことが複合的、多重的、そして、その場その場の機会に応じて生じてしまうということです。

つまり、動機とかあらわれの意味が非常に読み取りにくい。ただ、本人にはとにかく自己否定とか孤立感覚がつかまとう。こういう状態です。

東京都の具申の時は「自己有用感」という言葉を使ってもらったのですが、自己肯定というものは自分だけ、俺はすごくできるやつだみたいな人もいるので、自己肯定感というものはちょっと怪しいところもあり、ほかの人の役に立っているという感覚というので、有用感というものを使ってもらったのですが、この自己有用感がなくなる状態が、社会参加の回路がなくなるのと同じように、どんどん増幅しているということです。つまり、簡単に言うと「ダメな自分」だという、自分が繰り返し自分に語るという状態。

こういうことなので、何でそうしてしまっているのかという理由はよくわからないわけです。だから、最後の自分の有用感の喪失のところだけ聞いていると、大抵の相談機関の方とかが見てしまうのは、コミュニケーション障害なのではないか。人と触れられない人なのではないか、能力がないのではないかという話がまず出てきてしまう。これは全く問題のないわけではないのですけれども、そういう話が結果的に出てきてしまう。

また、「レジリエンス」。これは聞かれますか。大丈夫でしょうか。

レジリエンスという言葉をよく使います。耐える力がない。耐性力という言葉です。これはアメリカの心理学で導入されてきましたが、少年院などに行くような非行少年で一般によく言われますけれども、レジリエンスがない。耐える力がなくて、我慢ができないで、キレるのだということで、こういう個人の問題、特にその人の社会的な他者との関わりができない、個人化した病があるのだという声がすごく強くなってしまっているのです。

それは直に会った感じとしてはそうかなと思われるのですけれども、実は今、ずっと言っているのは、色々なことの結果として「ダメな自分」を語るから、こう見えていつてしまおうし、また、そういう側面がクローズアップされるのです。

今、お話ししてきたようなひきこもりの人たちの例は、概して我々が当人の心理的な問題を見ることにまなざしを寄せさせてきたと思うのです。もちろん、心の持ちようでその人の生き方が変わることは事実ですね。しかし同時に、その話は道徳性が混在している、ちゃんとしたルールに乗っかって行動ができないねという、いわゆるモラルハザード論。つまり、その人にモラルがないのだみみたいな、モラルに従って社会生活ができないのだみみたいな話のほうへ寄っていくことがすごく多くなってきたのです。

これは、繰り返しますが、本人の心理状態とか、あるいは道徳性とかコミュニケーションの欠如について問題にすることだけで解決することではないのだけれども、本人に対症療法をする立場から言えば、そこにすごく目が行きやすいのです。このことは案外、重要な一つの大きな視点を欠落させてきたと思うのです。

当たり前のことかもしれないのだけれども、こういう問題は実は関係性のひずみですね。

人とどう関わるかという、他の人と自分との相互関係の結果として出てくる病です。つまり、本人だけの問題ではないですね。つまり、彼らを取り巻く社会環境が彼らにとって非常に閉塞的だということです。彼らが自分のやっていることを認めてもらえないような環境が彼らを取り巻いているということでもあるので、つまり、だんだん本人たちが内側にこもるしか道がなくなった。言葉としては、「内閉化」といいます。「自閉化」ではないです。内閉化で、自閉化は自分でこもっていくという論理ですけれども、そうではなくて内閉化させていく。外の力がその人を内側にこもらせていく。そういう現象が増幅してしまっているということです。

社会的な視点に立ち返して、この問題を捉え直すことは必要だと思います。

(配布資料10ページ参照)

これは、教育の世界では本田由紀さんという有名な人が書いている日本型循環モデル。教育を挟んで、家庭と職業世界とがどんなふうな循環構造でくっついているかを絵に描いているものです。今までの論理で言えば、この家族というところがめっちゃめっちゃ強力に力がある構造になっていたのです。家族はもちろん、それぞれ色々な家族もあるし、中にはもちろん、貧しい家族だってあったり、あるいは決して融和した親和的な関係ではない家族もあったのですけれども、ただ、家族というもののの中に格差がすごくあったわけではないということがあります。割と中流の均一した家族が子供の教育を支えていくという構造です。

そこでの教育を受ければ、言うまでもなく、学歴が高くなったり、良い学校に行ったなどということがあれば、仕事にも直結していけて、終身雇用になるので、ここにもあるように、正社員というものが一つの大きなイメージになってきたということです。

それで、さっき見たような内閉化を促す環境という点で言うと、今、言ったような前提はみんな壊れてしまっているのです。家庭間の格差はどんどん広がっていますね。これは年収の問題としたって格差はめっちゃくちゃ広いです。

ひきこもりの家族に調査したとき、東京都でアンケートを150家族ぐらいにやりましたけれども、ひきこもりは年収600万円以上の豊かな層の山1つと、逆に300万円以下の貧しい層の2つに大きく分かれていました。通常、こんな調査はしないのです。でも、私どもは社会階層とか背景を気にするので、調査をすると、二こぶのようになっていました。豊かなひきこもりと貧しいひきこもりがあるのだなということです。

これは両方ひきこもりだけれども、環境はがらっと違います。つまり、家族の格差はこういうものです。ひきこもりが生み出されてしまうという、同じように見てしまうけれども、条件が全然違いますね。お金をいっぱい持っている人たちは何とかひきこもりから脱出しようと思って、どんどん子供の救出に投資するわけですね。1人の御家族などは自己破産してしまっています。それは病院とかですごく医療報酬の高い病院にどんどんかけたり、あるいは様々なお金を使って改善していこうと思うから、色々な施設に入れたりして、お金がどんどんなくなっていくのです。そのうち、お父さんが定年退職になると、途端に

年金暮らしになって、もう首が回らなくなってしまうのです。

残念だけれども、NPOの皆さんもよくおわかりのとおり、人件費とか色々なものをかけると、ひきこもりの方を例えば全寮制で預かったとき、全部、食事を出したら、1カ月に20万円以上取らなかったらやっていけません。これはNPOさんにとったら現実の問題です。それだけのお金を出さなければいけないといったとき、出せる人は出すわけですが、出せない人は出さないではないですか。つまり、出す層の人たちはそこで蓄えていたものをどんどん放出していくことになっているわけです。逆に出せない方の人たちは何も手が出せないから、放り出すわけです。ここの格差はめちゃくちゃ大きいですよ。

それから、今、ちょっと言っていたように、この職業のところも、教育のところよりも難しい。東京都のように、非常に就職先の多い自治体もありますけれども、地方はそうはいきませんね。これは私、今、島根県ですずっと活動をやらせていただいている、島根県の方にお聞きしても、やはり就職先は容易ではないです。

これはすごく頭に入れていただきたいのですが、大学には行けるのです。こんなことを大学の教員が言っていないかどうかはわかりませんが、大学は今、より好みさえしなければみんな行けてしまうのです。東京都の都立高校の、私立ではないですが、私立はどちらかという、東京のほうが優秀な人が多いから、都立高校の全体で、つまり、色々なレベルの都立高校をすべてがらぼんして大学進学率を計算すると何%になると思いますか。

参加者1 60%。

古賀氏 私どもの世代だったら60%とか考えるんです。違うのです。今は80%に届こうとしています。今、77%とか78%です。これは、専門学校へ行く人もまた10%ぐらいはいますから、働くというのは10%に満たない。つまり、それだけ学校へ行ってしまふから、大学は行けてしまうのですけれども、また就職のときはしんどいよね。大体3割5分ぐらいが、20代の前半でも非正規になってしまいます。

これは構造的に言うと、やはりいわゆる「就労のセーフティーネット」というものはそんなにうまく張られていないのですよ。だから、なかなか学歴が高度になったら就職できるとならないから、御存じのように、転々と転職しかなくなるということでしょう。今、これは悪いと言えないです。そのことを否定的になど言えません。つまり、そういう生き方もまた一つあるというふうになってきていますね。

これは我々の世代と違うのです。我々の世代は、申し訳ないけれども、そんなに専門知識とか能力がなくても、中堅労働者の層が広がったから、働けたのです。それがそうならないのです。だから、この循環構造が壊れてきてしまっているわけです。ここが非常に大きな問題です。つまり、こういうところの中にひきこもる人たちが投げ込まれていると考えていただく必要があるわけですよ。

学校に行っても就職が絶対とは言えないけれども、逆に言うと、学校に行かなかったら就職はないということですから、学校に行けなくなった不登校とかひきこもりの人はもっ

としんどいということですよ。非常にそういう図があります。

こういう社会環境の変容の中で、ひきこもりという現象を抱えている人たちがいるとしたら、問題の質は、今までの青少年問題を考えるようなものではだめになってしまっているのです。

まず、これは既に言ったので早回ししますが、やはり問題を抱えてしまっている若者の困難が多面的で複合的だというふうに、まずもって考えないわけにはいかなくなっています。それは例えば発達障害のような心理的な問題から生まれるケースもあるでしょうし、それから、ここに出ているような就労問題が出るようなときもあるでしょうし、色々な問題が生じるということはとにかく前提である。

だから、原因を一義的に決めたいと思えば、もう袋小路に入ってきます。何が問題かという、親御さんはどんどん過去へ戻りますから、あれも問題だった、これも問題だったとやりますから、とうとう、大体、生まれたとき逆子であったのが問題ではないかみたいなどころまでたどり着いていきます。皆さん、そうなのです。

私、インタビューしていて、皆さん、1時間半というお約束なのですが、だんだん悩み相談みたいになっていくのです。私の研究室で多くが大体3時間とか4時間お話しになりましたけれども、どんどん、「先生、いじめられていたからだったと思いますか」「いや、いじめだけではないんじゃないですか」などと私が言うと「そうでしょうか」などと言って、幼稚園のころみたいになっていきます。どんどん戻っていつてしまうのです。

これはやはり原因探しは難しいです。だから、原因をどこまで探せるかということは一定の制約が出てきますね。（むしろ専門機関としては将来に向かって対処できる原因を指定することが必要でしょう。）

それから、さっきも出ていたように、自分が悪いと考えるので、1人でこもっていきますから、他の人との関係、特に地域コミュニティでの支援資源というものの利用がどんどんできなくなっていくという特徴があります。

ひきこもりの人なんかは、やはりほかの人に見られたくないからというので、家のブラインドなんかを下ろしますでしょう。親御さんはもっとすごい。相談機関を選ぶとき、家から何時間ぐらいのところか平均値だと思いますか。相談機関を探るとき、家からどのぐらいの時間がかかるところを。

参加者2 30分ぐらい。

古賀氏 そうでしょう。みんなそう思うのです。近くてね。違うのです。平均でみんな1時間半以上のところを探すわけです。家の近くにいると、ひきこもっている子供がいるとわかってしまうと考えるから、遠くへ、遠くへ行くのです。つまり、自分の身近な、近辺のコミュニティに色々あっても使わないのです。東京の場合は結構、密度濃く施設があるから、1時間半行くと相当遠いから、遠めのところにわざわざ行っているのです。

だから、これは地域コミュニティの支援資源というものは、非常に本人だけではなく、

家族もまた責任を抱え込んでしまうから使わなくなっていってしまうのです。つまり、個人の問題に返そうとするから、恥ずかしいとか、私が甘やかしたからだということになってしまうということです。これはすごく厄介なことです。つまり、個人の問題で考えれば考えるだけ、地域に密着しようとしなくなっていくわけです。

さらに厄介なことに、これは非常に重要なのですけれども、どんな場所に行くか、誰と出会うかは非常に偶然なのです。20例聞き取りをしたら、1人だけ極度に改善したひきこもり事例の方がいらっしゃいました。この方は何がよかったかという、保健所の保健師さんが巡回指導されていて、胃がんの検診の勧めというものを持ってこられたのです。そのときに胃がんの検診の勧め方がとても優しく、安心できる感じだったのです。それで、つい「うちの子、何かひきこもりみたいなのです」と言ってしまったというのです。そうしたら、その保健師さんの方が「いや、そういう人もいらっしゃるわよ」と言って、ひきこもりの親の会だの、講演会のパンフレットだの、その翌々日ぐらいに何十枚も持ってきてくださったというのです。「一つ出てみたら」と言ったというのです。

それで、少し心が安堵するといいますか、一つ出たのだそうです。そうしたら、自分の子供より重度の話ばかりだったというのです。重症事例ばかりだった。うちの子は軽度かもしれないと思ったというのです。「そうしたら、少し明るさが見えた」と言って、それから考え方が変わっていくということで、これは流れがある。どういうふうの良い人になるか、わかりません。偶然と言ってしまふとあまりにも無責任に聞こえるけれども、ある種の年齢の中で偶然に出会う場所とか人というのがすごく影響を与えるケースがあるのです。

非常に大きな問題は、ひきこもりをしていて、だんだん年齢が上がっていけばいくだけ、こういう関わり合う人や場が消えていくという問題があるのです。軽度だなと思うと、親も連れていけるのです。御存じのように、病院というものも、ひきこもりの場合は、本人は行きません。だから、親が行くしかないのです。だけれども、軽度だなと思うと、本人の支え方も変わっていくらしくて、行ってくれたりしているのです。これはやはり大分違うのです。

だから、年齢が上がってきて、どんどん色々なものが積み上がっていけばいくだけで困難になってしまう。つまり、年齢の上昇は「不利」の感覚を深めていきます。だから、ある程度の年齢のうちにこれをやらなければいけない。つまり、タイミングの合う支援。よく、内閣府の言い方でいうと、「切れ目のない支援」が非常に重要になってしまう。誰がどう貢献してくれるかわからないのです。やはり社会が結構、ひきこもりの人を排除してしまっている側面もあるのです。つまり、本人たちもいられないと思ってひきこもるし、社会の側も働きかけをやめていってしまう側面があるのです。つまり、排除される社会の中に立っているという気分になってしまう場合が強いわけです。だから、「支援のセーフティーネット」というものを常に張り続けて、どこかチャンスはあると言ってあげないとならないのだけれども、だんだん、そうならなくなる。

後でお話ししますけれども、高校を中退するような人たちの10%ぐらいは辞めた高校に相談に行きます。行けるところがないと思うから。これは顔が見えるところしかいけないということを如実に示しています。顔がわかる人のところにしか行けないのです。だから、どんどん排除・孤立になってしまう。

こうなってくると、内閣府が言っている子ども・若者支援地域協議会は重要になってしまふわけです。つまり、これはただこういう絵を描くだけではしょうがない。きれいな図だなみたいな、そういうものはだめ。これを本当に動かさないといけない。やはりこういう図にあるような色々な問題やケースに乗っかっていけるようにしてあげないとならないということです。

これは、今、言ったように、どこが入り口や切り口になるかわからないし、誰が役に立つか、よくわからないからですね。これは医療の関係も、労働の関係も、福祉の関係も、警察も、さっき言った一人の人の中に埋め込まれて必要とされてしまっていることを言ってあげる。つまり、問題の性質を考えたら、このネットワークをやはり立ち上げないわけにはいかなくなっている。

そして、誰かがインテークしてあげて、まずはこのところへ行きなさい。医療機関が先だよ、福祉が先だよ、いや、教育が先だよと言ってあげなければならなくなってきた、そういう意味でコーディネーターがハブにならないといけない。飛行場の飛行機がくっつく場所みたいに、色々なコーディネーターが吸いつく場所をつくってあげてやっていかなければならなくなってきたと思いますね。

そこで、今みたいな問題を考えるときに、ひきこもりとかでどんどん関わるものがない、排除されるというのですか。何が「孤立」をつくっているかということは知っておく必要が私はあると思うのです。

一言で言います。日本の若者は学校以外に人と関わる場を今は持っていない。そんなことを言うと、ちょっと極端に言い過ぎると思うのだけれども、学校のウエートが高過ぎる。これから数字を示しますけれども、内閣府でやらせていただいた、ちょうど2016年にやった調査、2017年の『子供・若者白書』に載ったのですね。そこでは居場所とか接触相手の状況を調べるということをしていて、15歳から29歳。ですから、10代後半から20代までの人に色々な居場所や他者との接触の状況を調べるということをやらせていただいたのです。

それで、やはりやってみてすごく驚いたことは、今、数字が出ていますけれども、これは、毎日ではなくてもいいのですけれども、比較的、日々話をしたり、メールを投げかけたり、何かの形で関わりを持っている人は誰ですかと聞いているのです。

言っておきますと、必ず1つは丸をつけてねという方法です。全部つけないというのはだめ、必ず1つはつけてねと言うと、7割方が家族になってしまう。家族しか関わり合いがないという人が全体の大体5人に1人ぐらいいる。家族だけという人が20%強ぐらいあります。

次に出てくるのがどういう人たちかというと、高校とか大学時代の友達とか、地元の友

達。地元というのは、どうも調べてみると、中学時代ぐらいにつき合った、関わった友達ということで、中学校ぐらい、地域が同じということなのです。ここの2つのゾーンがめちゃくちゃ高くなってしまふ。

これはよく言われるように、インターネット上の仲間などというものは、年齢が高くなっても10%強ぐらいしかいきません。意外にいかない。これは、私はわかるのです。日本は、例えばFacebookで知らない人と出会って結婚してしまうような人はめったにいないのです。学生さんなどを見ている、知っている人とまたインターネットをやるわけです。LINEはそうですね。授業の仲間のLINEがどこかに組み込まれているのです。だから、彼らの連絡がぴんぽんと時々鳴っている。これは知り合い同士でやっているのです。つまり、インターネットの友達もこちらからしか来ないということ。高校とか大学の友達という。

ここの学校系の友達が、在学者はもっと高いのです。7割ぐらいいってしまうのです。だけれども、在学しない人たちでも大体40%近くいってしまうのです。つまり、20代でも、学校時代の友達と関わっている人が圧倒的に多くなるわけです。地元の友達もここよりはずっと下がるけれども、この2つのところがすごく大きくなっていて、信じられないぐらい、この2つに依存している。それで、全体の約半分がこういう2つの種類の友達を家族の次に挙げていく。つまり、学校時代の友達、あるいは学校での友達を持っている人たちは家族以外に対人関係がある人になっているということ。ほかはないということ。

職場は少ない。職場は難しいみたい。これもやはり色々なデータを見ても、職場はなかなか関わりがざっくばらんにならない。確かに、今、大学なんかでも若い人たちは僕らと話もしてくれない感じだ。だから世代が、接触の壁地ができていますね。やはり職場内の利害もあるから、なかなかという感じなのではないでしょうか。

年齢階級とか男女による区別もしています。

ここを見ていただきたいのです。さっき言った25歳以上の20代後半の層。地元の友達が34%、大学・高校の友達が35%。ここの2つが40%近くになっていますね。ここは大きいですね。大体、全体の半分がこういう友達を持っているわけです。

女性の方がやや高いですね。でも、意外に女性も高くないですね。ひきこもりの業界でも、私どもが10年ぐらい前に調査したら男性がやはり多かったです。でも、今は女性のひきこもりも多くなった。家事手伝いという概念は通用しなくなってきているのです。だから、そんなに差はない。でも、ちょっとは差があるのです。

もちろん、在学している10代後半とかは7割方が高校の友達になりますけれども、15年間の途中で半分には減らないということです。

この資源というものは、接触相手が1種類しかない。これは大部分、家族だけです。それから、接触相手が3種類以上ある。これは大部分、さっき言った、学校で出会った友達と、地元の友達です。ほとんどがそうです。実は職場の友達を挙げられる人がいいなと思って、アルバイトでもいいから、働いたことがあるといった人だけ選び出している結果を示しています。

そうやっていったときに、家族しか接触しない人たちに比べて、接触相手が3種類以上あって、学校時代の友達とも接触がある人たちは、ここで見ていると、映画などは倍の割合で見に行ってしまう。

それどころか、地域行事など4.8%対21.7%で、めちゃくちゃ圧倒的に5倍もたくさんの人と接している人が参加してしまっているわけです。当たり前ではないか、接触する人がいるからというけれども、そうではない。学校時代の友達ですからね。別に地域行事へ参加するのに一緒にいっているかどうかわからないのですけれども、全然変わってしまうわけです。

だから、こここのところに大きな壁があるよね。つまり、たくさんの人と接すると活動が生まれているよね。そうでしょう。地域参加活動は人との接触に引っ張られているという結果に見えるよね。つまり、学校のころの友達がいなかった人はどうになってしまうのか。参加するモチベーション、つまり動因、引っ張ってくれる力がないということになってしまうということ。これは大きな話だ。

そもそも学校はそんな場所ではないではないですか。勉強する場所とか、社会性を身につける場所とか、そういういわば機能とかを持っていて、それが果たされる場所となっていたのに、この話はそうではないのです。つまり、若い人は学校でしか人と出会っていないのではないかと思われる。外に場がないのではないか。あるいは職場はそういう付き合いにはならないのではないか。これはなかなか深刻な関係性の変容だ。だって、私どものころは地域社会に子供会みたいなものも結構あったし、もちろん、それが全部有機的に機能はしていなかったけれども、やはり色々なサークル活動があったような気もしますが、それがだんだん見えなくなっている。学校に収れんしていつてしまっているよね。

これは将来の自分について描きなさいと言った調査結果ですが、例えば「何でも話せる人がきっと、ずっと将来もいるはずだ」。何十年後かにもいるはずだという人がすごく、倍以上も違ってしまいますね。つまり、若いときの対人関係の経験は将来に引っ張られていくと考えているということ。もっと言ってしまうと、「トラウマ」も残るということ。対人関係の喪失はトラウマになって、後遺症になって、その後も引っ張られる可能性があることを示している数字になってしまっているということです。未来や将来の予測がここに引っ張られています。

これは他の部分でもあって、例えば「自分の収入で暮らせる仕事についている」みたいな項目は、こんなに違ってしまいます。対人関係が豊かな人はすごく自信があるわけです。「共通の趣味を持った仲間がいるはずだ」という人もすごく増えてしまうわけです。社会活動の充実の度合いはすごくあるよね。

ただ、もちろん、周りの人や社会の役に立つとか、こういう機能的なところになってきますと、この話も家族とだけという人も低くないのです。だから、さきに自己肯定感と言いましたけれども、自分で自分を評価できてしまうような側面だとそういうふうにしてしまえるところもあるのですよ。

でも、ずっと繰り返して言いますが、関係性ということになってくると、こんなに差が出てしまうのです。これはすごく大きな問題だと私は思っています。つまり、ネットワークを持てる人と持てない人というものにどこかで分化していってしまう、分かれていってしまう可能性をこれは示しています。

これからビデオを見ていただきたいのですが、今のようなことが出てくると、4にあるように「不登校」な人たちが学校で友達とどう関わるかとか、友達をどう見つけるのかとかという、その対人関係の現実を目を向けないわけにはいかなくなってしまう。特に学校の中での関係は非常に注目しておかなければいけないことが出てくるのです。

一言で言います。今の学校の中の対人関係は、「気遣い」で支えられている。大学だってそうだから、よくこういう講演会をさせていただくときに話すのですけれども、私はゼミと一緒に作業チームをつくる時、今、2～3回、授業を使っているのです。それが勝手にチームとかをつくると、こんな人と組みたくないという、あからさまな表情を出す人が出てきて、混乱するのです。そのあげくの果てに「先生、もうみんな仲がいいということにすごく気を使いますから、くじ引きにしてください」などと言う人も出てくるのです。誰と組むかというのがものすごく大きいウエートで、だから「さあ、グループをつくるよ」と言った途端に、大学生がみんな、下を向いて、様子を周りについてうかがうのだね。もっとも、さっき言ったように、大学生もだんだん高校生化しているから、そういうものもあるけれども。

そこで、今から「不登校なう」といって、東京シューレさんという、御存じの、フリースクールをつくったNPOさんがつくったビデオのほんの1シーンだけ見ていただきます。

この「不登校なう」の1シーンを見ていただいて、どんなことを皆さんたちが対人関係について気づくか。気がついたことを言っていたいただきたいと思います。

ほんの数分のビデオです。よく見てください。細かいところを見てメモしてください。細かいところが大事ですからね。

これはみんな、不登校の子供たちが脚本も書いて、演出もして、全部、ビデオに撮ったものなのです。東京シューレさんが25周年記念でつくったものです。

(ビデオ上映)

古賀氏 最後の掲示物は「クラス一丸みんなで仲良く」と書いてあるのです。

ごめんなさい。もう一回、見ましょう。よく見てください。細かいところをしっかりと工夫して演出しています。

ちなみに、このさいころは心の中のせりふだそうです。

(ビデオ上映)

古賀氏 どんなことに気づかれましたでしょうか。

参加者3 ラベリングというか、何か話題に乗っていかなければいけないのではないかがというのが外れる怖さなのかなと思いました。

古賀氏 そうですね。皆さん、シールを貼っているのです。あれが有名なといいますか、

「キャラ化」というものです。キャラというもので読み取るわけですね。人をああいうふうにパターン化していこうとしますね。

ほかにどうでしょうか。

参加者4 やはり人に合わせないといけないというところがつらいのかなというのを感じました。

古賀氏 人に合わせようとする。

申し訳ありません。ちょっと突っ込んで、特にどんなところを人に合わせようとしていますか。

参加者4 遊びたくもないのだけれども、一緒に遊ばないといけないとか。

古賀氏 そうですね。遊びたくなくても遊ばないと浮いてしまうなという言葉で、浮くという言葉ですね。そういうのはありますね。水面に浮いてしまう。

どうでしょうか。

参加者5 各グループごとにそれぞれ何か独立していて、余り相互に関わり合うという感じがしないというところがあります。

古賀氏 そうですね。御指摘のとおりで、小グループになって分裂するという傾向です。これは大学などもすごく、LINEなども小グループでごちゃごちゃあって、横のグループへ行くと何も情報が共有されていないという恐ろしさがありますね。

もう一つぐらい、出るかな。細かいところです。つくっている人は細かいところばかり気にしているのですから。

そうなのです。細かいところを見てもらわないと、解釈にならないらしいです。最初は私もよくわからなかったのです。

古賀氏 では、もう一つ、後ろへ行って、ちょっとごめんなさい。

参加者6 ただ、1人だけクラスで孤立して本を読んでいた人がいたぐらいでしょうか。

古賀氏 彼女の、ちょっとわかりにくかったのだけれども、ワッペンが白くなっていたのがわかりましたか。わからなかったかな。ちょっと画面が小さくて、彼女はキャラがないということなのです。浮いてしまうということは、キャラが位置づけられていない。つまり、キャラは承認なのです。さっきラベリングと言いましたのは、承認されるということだったのです。

他にも何か気がつくところがありますか。

では、どうでしょうか。

参加者7 さっきの、自分ではみんなの仲間に入っていきたいという気持ちはあるのだけれども、そういう気持ちが自分は、そっちに向けようとしているのだけれども、なかなかそれが素直に出てこないというのを感じました。

古賀氏 あそこで一つ重要なのは、サイコロにもあるように、自分らしく振る舞いたいと考えるのです。個人として、個性を發揮してということが前提なのです。だから、それで見合うような場所を見つけないわけですがけれども、ないということを言っていますね。

ついでに言うと、皆さんたちの中で時計が映ったのは気づきましたか。ああいうふうに時間が生活を切り取って、どんどん進んでいってしまうという感覚。これは不登校の子たちがみんな言うことです。時間管理されている。だから、あの局面で友達と一緒にやれないと次の時間に行ってしまうということです。

わかりますか。例えば、給食を食べるのが遅くなってしまったときのことを思い出してください。あまり皆さんは、そんなことはないですか。早く食べてしまうのですか。給食をちょっと遅く食べてしまって、ぼつんと残ったときを思い出してください。それは時間が進んでいってしまうと、食べ残していたあなたは浮いてしまうわけです。

いいでしょうか。時間はどんどん進んでいって、その人の行動を動かしていってしまっているということです。だから、ああ、浮いてしまった、やばいなという時間管理のイメージなのです。

まだ、他にも何か気がつきましたか。もうないかなという気もしますが、どうぞ。

参加者 8 顔がほとんど出なかったのがすごく気になりました。

古賀氏 顔ですね。あれは、実は本当の不登校の人が出演しているからなのです。東京シューレの本当の不登校の子が出ているもので、顔を映せない。主役の子だけ別なところから、劇団から連れてきているのですけれども、あれは本当の子なのです。そういうことがあります。

ただ、皆さん御指摘のように、この番組のほんの1シーンは、我々が思っているように、不登校の子供たちは人と関わらないようにしているのではないということがわかりますか。関わろうとするから苦しくなっていくということがわかりますか。関わろうとするのに、関われないから苦しいのです。そうですね。ここをちょっと、我々は関われないのだと先に思ってしまっていますけれども、そうではないと思うのです。関わろうとして、色々やるけれども、自分の立場がうまくつかまえない。

実は、本当はこの「不登校なう」という劇映画は3事例挙げられているのです。今、御紹介したのは不定愁訴系で、頭が痛いとか、おなかが痛いという訴えの、割と拘束のある生活に対して訴えをしている人で、あと一例はいじめられていることの恐怖を持っている人です。例えば机の上に菊の花が手向けられてしまっているみたいな、非常に嫌な、そういう例が一つ。

もう一例は、これも意外なのですけれども、よくあるのだと言うのですが、優等生。スポーツも万能で、成績も抜群なのです。ところが、ぱたっとバーンアウト、燃え尽きるのです。皆さん方も気をつけてください。優秀な方とかは燃え尽きてしまうのです。良い人であろうとするから、ハイテンションな状態でずっといこうとしたとき、何かつまずく。そうすると、もういけなくなってしまっているという例なのです。

だから、サッカー選手でゴールしたりするシーンがいっぱい出てくるのです。これはみんな思わないでしょう。不登校の人は運動ができないのではないとか、体を動かさないのだとか、決めつけているでしょう。そんなことはないのです。つまり、こういう優等生を

演じることの燃え尽きということを訴える事例もあるのです。

いくつものものが全て、つまり学校の中で自分が浮くという不安とかリスクを訴えているのです。いいでしょうか。どんな形で自分のポジションがとれるかはお互いの関係だから、つまり、優等生というポジションをとることも可能なら、逆にそうではなくて、オタク系と理解されてもいいですね。もちろん、そこには、今の学校では序列がつかますけれども、そうやられても場があるわけですが、その場にうまく乗れないという不安が訴えられているのです。

つまり、おもしろいと言ってはいけなけれども、不登校の子供たちがつくっている、この番組を解説してもらったものを見るとわかってくることは、不登校の子は本当に学校嫌いではないのだ。むしろ学校にこだわって、教室での関係の病の中で苦しむ子たちなのだということがわかる。

これは非常に重要です。学校という場で対人関係があれだけ大きなウェイトを占めるといふさっきのデータを見た後で、このことが出てくると、リスクは大きいですね。うちの学生だって、盛んに言いますね。「みんなに嫌われちゃって、やばいよ」みたいな。何とかしなきゃとなっているわけです。

これはさっき見ていただいた「自分らしくないなあ」というシーン、自分らしくしても受けとめてくれないということ。ですけれども、何といても重要なのは、「クラス一丸みんなで仲良く」。これは日本の社会でクラス一丸、グループ、集団というものを優先してきたわけですが、これがやはりすごく重苦しく、何だ、このスローガンはという感じ。実体がないではないかというわけです。でも、表面的にはみんなクラス一丸のふりをしていますね。さっきのものも結局、決して、そこに逆らいはしないです。こういう二重構造が彼らからはすごく見えてしまっている。

よく「島宇宙化」などといって「いつメン」などという、いつも一緒のメンバーが大事だし、小グループが乱立するし、グループの中の内輪の話題とか語り方が大事になってしまう社会が存在しているということです。つまり、クラスの共同体というよりは、細かなグループの分立の中で学校生活が運営されてきているということです。

よくこういう言葉が使われるのです。相手の人格を考えるより、「ノリ」が合う人を探すということです。これは「共振的コミュニケーション」という言葉でよく表現されていますが、外見とか、会話とか、持っているものとか、好きなアイテム。これは大事です。NPOで不登校とかひきこもりの方々とか関わる方々は、こういうアイテムに対してすごく敏感な方がいっぱいいらっしゃる。漫画とかアイドルとか、こういうアイテムがあることで話せるわけです。アイテムなど「ノリ」の合う要素を見つけること。これが重要になってまいりますね。

それで、人格的なコミュニケーションで相手の人はどんな性格で、どんな考え方で、どんな過去があつてとか、そういうことを詮索してやっていくこと自体が「うざい」と思われがちです。だから、これはもっと直感的に乗れる人、乗れない人があるということです。

4月、5月でもう仕分けられてしまう。非常に敏感になる。

いじめの問題とも実は地続きです。いじめの問題というものは、確かにいじめる、いじめられるというふうに考える方がいらっしゃるかもしれませんがけれども、今、言った対人関係の困難のあらわれです。確かに暴力的にいじめてしまう人もいるかもしれませんがけれども、要は浮いてしまう人をつくり出す作業です。これは浮いてしまう人ができれば仲良しもできるわけですから、背中合わせですね。浮いてしまう個人ができればグループの結束力は強まるのです。こういう力学が働いてしまっていますね。

後でまた見ていただきますが、いじめにどんなものがあるか。平成26年で、ちょっと古いデータを持ってきてしまっていますが、実はいじめられるということの大体6割以上の内容は、「冷やかし、からかい、悪口、おどし文句」なのです。つまり、さっき見ていただいた映像的な、ああいう世界が日々繰り返されることが多くの子供の感じるいじめなのです。だから、我々は暴力的なところへ進むようなものもありますけれども、統計でいえば2割ぐらいで、実は日常の、ボクシングでいえばジャブを打つような、ぱぱっと来る会話のやりとりが傷を負わせていくのです。重苦しくさせるということです。

それで浮いてしまう人をつくり出して、本人がそれを受けとめ切れればいいのですけれども。浮いてしまう人になるということは、そういう互いのジャブの繰り返しの中から見えてくることなのです。

もちろん、いじめの中には、ここに出ているように、金品をたかれるとか、誹謗中傷される、ネットいじめとかもありますけれども、多くの人たちが感じる日常的いじめというものはこういうレベルのことです。こういうコミュニケーションの世界の中での、自分へくる色々な誹謗とか中傷とかの感覚です。

もっと言ってしまうと、こういう悪口が「痛い」と感じるということです。あるいはそういう悪口で引っ込むと「病んでしまう」ということなのです。痛くて病んでしまうのです。だから、これはすごくナイーブなのです。今、学校は難しくなっているではないですか。先生方だって、ちょっと強烈なことを言ってしまったら、生徒が痛いと言いますから、痛いと言われたら、それこそハラスメント委員会から訴え出られてしまいます。生徒の側で痛いとなってしまいますから。

私は大学のハラスメント委員を4年もやりましたけれども、死にそうでした。年間何百件という件数の相談が来てしまいますから、来るものを我々が一つ一つ調査するわけでしょう。専従職員も2人もいるのに、それで片づかないで、教員8人ぐらいで、みんなで毎日やっている。つまり、こういう暴力性です。

これは、力が弱いとか無抵抗の人ほど被害者なのです。力が弱いというのは、さっき言ったようなことなのです。ああいう浮いてしまう、手が出せないという感じ。ここが一番浮くわけです。

いろいろなデータの中で一番興味深いので書いておきましたが、例えば校内で暴力がある、ハラスメントがあるみたいな訴えは年々歳々、どんどん増えてくる一方なのです。だ

から、校内暴力とかが吹き荒れた1980年代より、この申告件数のほうはめちゃくちゃ増えてしまっているのです。だから、これはやはりものすごく過敏に暴力性を感じている。殴られて痛いのではないのです。言葉が刺さるという感じです。こういう暴力性にすごく過敏に反応するようになってきているということです。

31ページのところですけれども、つまり、こういう仲間が排除される条件は、実はすごく偶発的なものが多いのです。よく言うのですが、ちょっと言いなりになる。言われると、はい、はいと聞いてしまうとか、あるいは勉強ができるみたいなものも含めて、目立つとか、あるいは太っているとか、痩せているとか、ちょっと体の形が異型だとか、何かちょっとしたことが見つかって、そこに攻撃ができればいいわけなのです。だから、よくこういう原因のことを「機会原因」といいます。つまり、チャンスがあって、何か出来事が起きて、そこで原因と思われることが表にわっと出て、みんなに共通に理解されれば、いじめる要素として、それがずっと定着していってしまうのです。

これはなかなか厄介です。誰でもなり得るということです。例えば、変な話ですけれども、小学生なんかですと、ちょっと失敗して、尿を漏らしてしまったなどということがばっと出たら、わっと汚いとなっていってしまう。もう二度と学校に行く気にならないなどということになってしまいます。それは実際、ひきこもりの人たちの中にもそういう例は紹介されているのですけれども、いじめというものはそういう問題なのです。ちょっとした機会の中から問題性を見出す作業が子供たちの中に回路として埋め込まれ始めている。これは彼らが悪意を持ってやっているのではないのです。つまり、そういう防衛の仕方をするのがないと、教室の力学の中へ埋め込まれていってしまう、飲み込まれていってしまうから。

ここは非常に重要なのですよ。今までと違うのです。教室は一体性のある場ではなくなってきている。みんながそういう力学の中で生きている場に見え始めているということです。

ここまでのまとめは後でゆっくり読んでください。つまり、ここで言えることは、学校に対人関係の資源が集積されているにもかかわらず、この学校での体験で、良いほうにいく人と良くないほうにいく人が結構、両方分かれてくるということです。これは非常に厄介な問題です。つまり、学校が勉強を習うとか社会性を育成するということとは異なる、関係の場として非常に強い意識を持たれ始めているということです。

だから、変な話、うちの大学だって最近はみんなで休める広場をつくらうとか、カフェを連れてきてやらうとか、そんなことをやっています。関係を良くしない限りは定着しません。学習なんかになりません。やはり関係を良くする作業のためにお金をどんどん投下し始めています。各大学がそうです。

居場所づくりとも言えますが、同時に、今、言ったように、関係が非常に不安定です。こういう関係性のリスクというものを子供が感じてしまうということをやはり頭に置きたいです。

今、ずっと学校が対人関係の資源の軸になっている。しかし、それでいながら学校が色々な困難を抱えるということを言いました。ということは、不登校とか中退とか、学校を辞めてしまった人というのは一番被害を被ってしまっている人ということです。だって、人との関わる資源を失ってしまうわけですからね。学校はその集積だとしたら、学校を離れると資源を失ってしまう。

私は学校を礼賛する気などないです。つまり、他にないということ。ここが厄介だ。学校に余りにも集積し過ぎてしまっているのです。だから、学校というものが多くのものを抱え込んで動いてしまっている。これは忙しい、仕事が多いみたいな話題もありますし、同時に、今、お話ししてきたような、色々な援助とか支援を学校でなければやれなくなってきてしまっていることが出てきてしまっているということです。

つまり、学校に行かないということが、単に学校に行かないから勉強が遅れてしまうみたいなことで済まない要素を抱え始めてしまっている。これは決して良いことだと思っていないです。つまり、学校以外に色々な場があったら救われてしまうことが、学校へ、学校へと行ってしまっている。

ここから少し、高校中退の人の話をします。

東京都で高校中退の人を調べてくださいと言われたので、私、調査のリーダーになってやりました。大体、こういう調査をするときに、やれる人はあまりいないので、頼まれてしまうのです。私は最初からすごく強く言ったのですけれども、ちゃんとした「悉皆調査」をなさйтеということをしたのです。この悉皆調査とは難しい言葉なのですが、中途退学を都立高校でした人、全員に対して調査票を投げるというやり方をしてくださいということです。

何でそんなことを強調するかというと、文部科学省が今まで中退調査としてやってきたものはみんな教育委員会から各学校で中退者を知っている先生方をお願いして調査票を配ってきたのです。これは別に悪いことではなくて、そうしないと中退者は答えてくれないからなのです。でも、それはだめと言ったのです。お金をちゃんと用意して、きちんとした調査で全員に配ってくださいとやったのです。それが悉皆調査なのです。

20%以上を回収しましたがけれども、5,000人ぐらいが対象です。2年間で大体5,000人以上、6,000人ぐらいがやめていくのです。この対象で、ヤマカンが働くので、絶対やめた人は、1回やめているだけではないから、3回やめたり、5回やめたりしている人がいっぱい出てくるから、中退は複数やめている人が出てくるからと言って説き伏せて、つまり、やめるというのは一回だけのものではないのだということを盛んに言って、とにかくそういう人もオーケーとして、確認する作業でやりましょうと言ったのです。

別に自画自賛するわけではないのですけれども、こういうふうにして、正確に中退者の状況を把握したものは、実はほとんどないのです。さっき、内閣府の居場所と対人関係の調査の結果を出しましたが、あれは6,000人調査で、とても有益です。ああいう調査は、実はやられていない。すごく全体像がわかりますね。ここでは中退者の全体像のわかるもの

をやったのです。

中退するとき、さっきもずっとお話ししてきたように、多くの子供たちは学校が嫌いなのだという話にずっとなっていたのです。先生に反抗するとか、それから、色々な問題行動をとる。規則を守らないとか、そういう人たちがばかりだと思われてきたのです。

だけれども、調査する前から私はそれを疑っていましたので、やはり違うのではないか。実際、結果を見ていただくと、中退した人で問題行動をしたという経験がたった10%なのです。たったといっても、そんなにいるではないかという人もいらっしゃると思うのですけれども、昔の中途退学する人たちの、さっき言ったヤンキーの人たちのイメージからいけば、校則違反など日常的だという感じの人たちがいるのだと思っても、そういうものももういないです。10%です。

仕事をしたいと思って、アルバイトとかに精を出してしまうという人も16%です。高校生はアルバイトをしていないです。これは確かに、いっぱいやっているように思うかもしれませんが、実は文部科学省が定時制高校に対して、アルバイトをしているかどうか、チェックした調査があるのです。定時制高校生の大体60%しかアルバイトをしていません。残りの40%はしていません。もう働いていません。これはやはりすごく重要なことなのです。つまり、今までのヤンキーな高校生のイメージ、やめる人たちのイメージとは全く違う。

では、何が1番だったのか。これは驚くぐらい、ここに出ているような、生活リズムの崩れです。学校へ通学することのバーが高いということです。「通学するのが面倒だった」「自分の生活リズムが学校と合わなかった」。こういう人たちです。つまり、朝起きて、頭が痛いとか、おなかが痛いとかにならずにずっと行けたということがない。さっきの不登校の人たちとすごく共通しています。生活リズムが合っていない、あるいは夜起きてしまって昼間寝ているみたいな昼夜逆転とか。こういう問題が圧倒的に大きくなってしまっている。ずっと学校へ行く習慣が形成されていないということです。

さらに厄介なことに、中途退学率の高い学校を調査票の結果からプロットしていくと、定時制・通信制が高いのは当然ですが、交通機関から離れて、地理的に条件が悪い学校ほど退学率がすごく高くなってしまふ。すごくばかばかしいことのように思うかもしれませんが、エコロジカルな問題です。つまり、学校へ行くのに労力のかかるところへ行こうとすると早く起きなければいけないけれども、なかなかそうならない。つまり、生活の習慣を形成することが困難である。

それで、この人たちに聞き取りをしました。こう言われました。大部分の家庭が、朝の段階で家に親がいないのです。みんな、もう働きに出ていってしまっている。自分で起きなければならない。自分で朝御飯をつくって食べなければならないという、こういう人たちだけ。つまり、ここに出ているような、生活リズムが合わないと言うけれども、この人たち自身が援助してもらえていないのです。自分で御飯を食べて、自分で目覚まし時計で起きて、行かなければいけない。目覚ましの時代でもないですから、スマートフォ

ンで起きて、行かなければいけないということです。

休みを積み重ねていくと、高校だと進級ができなくなってしまう。そうすると、行くのが嫌になってしまうのです。こういう流れがある。つまり、生活習慣。こういうものを、有名な社会学者のブルデューという人は学校のハビトゥスと言っています。ハビトゥスというのは習慣ということなのですけれども、習慣が資源化していないのです。だって、変な話、私なんか大学へ行くのを嫌だと思える日はあります。でも、行ってしまいます。奥さんの怖い顔が横にあったりするから、行ってしまいます。要するに、習慣形成として行ってしまっている場合が圧倒的に多いのです。でも、それが重苦しくなって、1歩目が出なくなる人たちが多いということです。

これはハビトゥスの欠落で、このハビトゥスの欠落を軽く見てはいけません。つまり、人間の行動の中の大きな資本は、習慣行動の蓄積としてなされているものが大部分です。自然とやってしまう。世界の高等教育の研究者が大学において学んだり得たことの中で最も生涯にわたって残存する度合いが高いものは何か調べています。一番残存の度合いが大きいのは学ぶ習慣と言われています。本を開いて読んだり、ちょっとメモをとったりする学ぶ習慣は20年、30年、残存するそうです。でも、知識は消えていってしまう。だから、学ぶ習慣は恐ろしい。毎日の行動として体についてしまっているから、やってしまう。

皆さんたちだって、私がメモをとってくださいななどと一言も言わないけれども、ちゃんととってしまいますものね。すばらしいです。これは学校習慣がちゃんと身につけておられるのです。本当です。うちの大学生は言わないと「寝ていないで、ちゃんととらないと」とかと言わないとね。だけれども、そういうふうにとってしまう。ちょっとメモしてしまおうみたいなことも含めて、習慣形成なのです。

何で、またそんなことを強調するのかというと、つまり、こういう習慣形成が実は学校に行くということ。それは別に勉強するかどうかは二次的なのです。行くということをつくるということです。この行くというところのモチベーションが大きい。

これは学校を卒業してしまったけれども、進路が決まらなかったという、一番不安定な層の人。これは中退の多い学校は大体、進路未決定と言われる人が多いので、この人に調査してもらったのです。比較しないと、中退者だけが悪いとか、すぐ言い出すから、東京都に進路未決定も一緒にとってと言ったのです。卒業していない人をラベリングするのはやめて、一緒にとって比べるからと言って、これもまた無理にお願いしてやったのです。中退者と進路未決定者、両方調べました。

これははっきりしているのです。何があつたら卒業できましたかと聞くと、進路未決定の人たちは、友人や仲間から手助けがあつたから卒業できたという人が5割もいるのです。ピアサポートというものです。助けてもらったことがある。テストはこの辺が出そうだな、こんなことがわかっていると良いと教えてもらった。これが中退した人は10%台になって、全然ないのです。

それから、学校に自分の居場所があつた。少しほっとするようところが学校の教室以

外のところにもあった。最近は図書館でカフェがあったりする高校とか、結構あります。居場所づくりに熱心で、うちだって、さっき言ったようにカフェを入れたから、カフェとかに行って、授業には来ないみたいな、まあ、いいですけども、居場所だからね。こういうふうな居場所で、これを見ると4割方、進路未決定の人はあるけれども、中退者はないのです。

さらに、ここが重要です。ここは二重丸です。家族の理解と協力があつた。これは大きいね。これも進路未決定者は4割ぐらいがあつた。ところが、中退した人はあつたというのが10%、ほとんどない。

だから、これは援助資源という言葉があるのです。支援をする援助の資源がなさ過ぎる。もっと言えば、悩みを相談できる人や場所があつた。これも大きな差がついていて、この辺の4つぐらいの項目は全然、差がついてしまっている。

では、さっきからずっと言っているように、勉強することの意義がわかつたからとか、規則正しい生活とか、通学とか、決まり事とか、こういうものはやるけれども、要は、足りないのはここですね。援助してくれる人、場所がないという、ここはとにかく決定打として、この2つの人たちは分かれているよね。

さっきからずっと言っているように、学校での対人関係の資源は、実は習慣形成という文化的な資源とくっついている。あげくの果てに、さらには社会環境をつくるもとにもなっていくから、またまた次に誰かと関わることを難しくしてもいるから、これは二重苦なのです。

つまり、学校を辞めるということは、私は悪いことばかりではないと思っています。ただ、学校を辞めてしまうとこういう資源がみんな失われてしまう。こういう構造。つまり、ここを補ってくれたらいいのに、補うところがなかなかないという現状があるのです。

この資料には、そのことが書いてあるので、後で読んでいただくといいと思いますが、こういう言葉があります。中退した人がこういうことを言っています。「私生活が揺れてくるともう学校へ行くどころじゃなくなっちゃって、家にひきこもっちゃったり、リストカットしたりとか」ということをインタビューの中で言っています。これはすごく耳が痛い言葉です。学校が嫌いなわけではないのです。私生活が揺れてきて、関係が崩れていったら、もう学校へ行くどころではなくなる。そうしたら、あとはどこにいられるのかといったら、家にいるしかない。家にいると一人ぼっちだからリストカットしてしまうという、何と悲しい構造だろう。関われる人を学校で見失ってしまう。

こういうところしか行き着くところがないというのがあって、この人は5回も中退しています。女性なのですけれども、ボーイフレンドができて、その人が大学へ行っていると聞くと、やばい、学歴がないと思って、また学校へ行く。でも、また同じことが起きて、やめてしまう。アルバイトも、最初のうちはファーストフード店だけれども、だんだんお金がないと困るようになっていくから、キャバクラ嬢になったり、だんだんハードになっていく。さっき言った排除の社会の論理の中に飲み込まれていくわけです。だから、この

子の言っていることはなかなか理にかなっている。私生活が揺れたら、学校へ行くところではないのだ。だから、学校は嫌いなのではないと言っているわけです。

そうになってしまうと、では、どういうふうに、この中退者をめぐる支援環境のありようを考えるべきかということですが。

これは、中退をしている人たちはとにかく、まずシングルファミリーが圧倒的に多いのです。これは東京都の調査ですから一概に言えないですが、父親がいるのは6割ぐらいで、あと4割は父親はいないのです。それから、母親がいるのも8割強ぐらいで、要するに母子家庭がむちゃくちゃ多いけれども、父子家庭もあるということなのです。

まず、とにかく家庭的な基盤が弱いのです。つまり、学校で行けなくなったら、家庭が支えてくれるというものではないということなのです。それどころか、聞き取りの中では涙なしでは聞けない話もいっぱい出てきて、例えばひどい話が、高校入試のときに朝、両親に呼ばれて「正座しろ。ここで大事な話をするから」と言われたのだという人がいて、その子は涙ながら話すのです。

インタビューはそんなに楽しい話ばかりではなくて、嫌なこともあるのだけれども、その子は涙ながらに「ここへ正座しろ」と言われ、「おまえは今日、入学試験という人生の分岐点に立っている」と言われたわけです。すごく難しいことを言っているなと思って聞いて、分岐点ねとかと言って、だから、頑張れということで。「もう一つ、大事なことを言っておく。お父さんとお母さんは今日限り別れるから」と言われたと。

これで入試に行けと。すごいな。これは、私は聞いていて、かわいそう過ぎる。本人もひどいと思いませんかみたいなことを言うのだけれども、その後、「でも、親の愛情かもしれない」とも言う。ここは難しいところだよね。やはりどんなことがあっても、自分の親を悪くは言いたくないと思う。だから、そうしても「親の愛情かもしれない」などと言うわけです。

それで、経済的に豊かではない。中退者の場合、特にそういう状態が多い。経済的ゆとりも少ないです。だから、ひきこもりの場合は豊かな階層もまだあるけれども、中退なんかの場合は経済力のない親御さんが多いです。

これは学校ごとでちょっと違うのです。例えば定時制とか、通信制とか、いろいろなところほど厳しくなったりしているので、学校別に集計しています。今はエンカレッジスクールとかチャレンジスクールという、こういう子だけを受け入れている学校も東京の場合はあるのです。地方でもあると思うのです。こういうところの人たちも比べるために挙げておきました。ただ、全体にとにかく家庭環境が非常に悪いです。

退学の人に相談した人ですけれども、これも複数回答可なのですが、まず、とにかくわかることは、退学なんかでも誰にも相談しない人が2割いる。だから、5人に1人が誰にも相談しないで辞めていくということなのです。

まず、第一義的に出てくるのはお母さんで、これは、日本の教育の社会がお母さんで回っている。お父さんは影が薄い。お父さんは35%で、高校の先生と同じぐらい。こういう

状態ですから、もしあるとしてもお母さんです。2割の人は何も言わずに辞めていく。

さらに、これを見ていただくと、辞めてしまった人を、辞めてしまったから勉強を続けたいと思っていた人、仕事に就こうとした人、それから、勉強もしているし、仕事もやろうとした、両方やっている人、両方ともしない人という4種類に、辞めてしまった後の経歴で分けてみました。ちょっと丸をつけてあります。

まず、勉強しようとする人ほど、2割が主として心療内科とか精神保健福祉センターとか、相談窓口に行っているのです。結構、本人たちも働けない自覚を持っています。逆に勉強したいとも思います。これはまた非常に両義的なのですけれども、親も病院へ行けとなりやすいのです。もっと言えば、それは良い悪いは別です。薬を飲めという話も出てきます。投薬率が高いのです。これは薬というものは良い面もあるのです。でも、そういうこともここにつきまってくる。もう薬を飲め、静かにしているという話も出てきます。

それから、働きたいという人たちはハローワークへ行きます。16%で、当たり前ではないかと思うかもしれませんが、他はない。例えば職業訓練支援センターみたいな、こういうところだってもっと使っていいかもしれないけれども、ないです。0.2%で、これはなかなかわかってもらえていない。

さらに言うと、勉強も仕事もまだ曖昧に、両方、どっちもやろうとしているなどという人ほど、高校へ戻って、退学した高校で先生に会って相談している。ほぼ10%というから、10人に1人は高校へ戻っていています。さっき言った、顔が見えるから、この人たちのところへ戻る。だから、ハローワークと病院と高校という、この3種類だけがほとんど集約してしまっていて、他の支援機関が使われていない。

これは聞き取りをされていて、使われていないといいますが、知らないのだと思います。よく言われるようなフリースクールみたいなものはどうなのか。フリースペースとか居場所とかはないのかというので、ここはあげているのですけれども、なかなか使われない。これはやはりさっき言ったように授業料が高いのだね。経済力がないから、この人たちは授業料の高い場所になかなか行けない。それは、フリースクールをやっている方々がいらっしやったら、ごめんなさい。皆さんたちを責めているのではなくて、やはり人件費がかかるから、一定程度は授業料を取らなければいけないと思うのだよ。そういうことの中では、なかなか行けないのだよね。

それから、例えばサポートステーションなどはすごくこういう人たちに一番入り口としていいところなのですけれども、知らない。本当に知らない。サポートステーションを知っている人は東京でも本当に稀なのです。これは相当色々なことをやっているのです。でも、知らない。だから、高校で今、サポートステーションを紹介してもらうように、辞める前に必ずパンフレットを渡してとやっているのです。そうしないと、これはわからない。

つまり、こうやって見ると、支援機関がまだ有効に機能していないということがわかります。限られたところだけで、場合によっては、中退するのは本人の問題だとさっきずっと最初に言ったような自己責任論的論理が強くなるから、病院に持って行ってしまおうので

す。連れていってしまう。これもまた、病院で全てが解消するわけではないから、非常に厄介だったりしますし、また、さっき言った、割とヤンキーで、働くことだったらうまくやるみたいな、例えば建設業とか居酒屋みたいなサービス業でもうまくやれるという人たちはいいのだけれども、そういう人たちがばかりが多いわけでは今はないので、なかなか働くこともつながりが難しくなっている。

つまり、社会参加する条件がなかなか支援機関を介しては得られていない現状があるし、家庭にも頼れない。つまり、これこそ排除とか疎外ということですね。そうすると、何が起きるか。

これは退学した後、こういう質問項目をつくること自体が、調査チームの何人かでこういうことに詳しい人を集めてきたので、質問をつくること自体がやはりすごく仕掛けがあると思いますけれども、退学してから、何もしない時間がどのくらいありましたかと聞いているのです。悩んでいて、働くことも学ぶことも何もしなかった時間はどのくらいありましたかというのを聞いています。

これは、そういう人たちが曖昧で、ちゃんとしなくて、意思決定ができない人ということを知ったわけではないのです。つまり、悩むよねということ。若い人たちは、学校を辞めたからといって、次にぱっと決められなくて、悩むよね。これは案の定で、これは退学してから2年半ぐらいの範囲の中で聞いているのですけれども、6カ月以上進路が決まらないで悩んでいた人が3人に1人います。本人たちもすごく悩んでいたと言います。毎日、どうしようかなと考えていたのです。それで、どうしようかなという具体的な像は描けない。そこは難しいよね。10代、20代入り口ぐらいの知識と経験と情報の中で、どうしようかなは考えられるけれども、どうしようが作り出せる人はなかなかたくさんいないよね。

そうになってしまうものですから、このインターバル期間がすごく長くなっていってしまう。つまり、これは下手をするとひきこもりみたいなことにつながっていきかねない現象なのです。出口がなかなか探せない。

そんなもので、こういうジグザグなライフコースになりますね。学校から離れた後、また学校に戻ろうとしたり、働こうとしたり、働いてまた戻ったり、ぐちゃぐちゃいろいろなことが襲ってきます。こういうイメージというのは、きっと皆さんたちが関わる若い人たちにもあるかと思いますが、学校を離れると、次に待っているのは、こういう結構危なっかしい場所だったりもしているという現実なのです。

だからといって、学校を礼賛しているのではないのです。つまり、なかなか次の取っかかりがわかる条件がないということだと思います。もちろん、高校卒業認定試験などを受ける人もいます。

ちょっと言っておきますと、中退者の中にも色々な人がいて、進学校で2年ぐらいで、学校はいいからといって、高卒認定で全部合格してしまって、学校を自ら1年間辞めてしまった人もいましたから、色々な人がいます。色々なレベルの人がいます。

彼らが求める支援ということですが、とにかく、この人たちは皆さん、無料でやってくれることを求めがちですね。職業とか資格取得を指導してくれる、授業料を無料にしてくれる、仕事に就くアドバイスをしてくれる、若者向け公営住宅を用意してくれるなどというものがすごく高くなっていますが、お金のかからないサービスということにやはり多くの若者が支援を求めることになってしまっています。この辺もさっき言った背景を見ると、ああ、そうかなという気がします。

ここからが今日の話の最後の核になるところで、まだもう2つぐらいあるのですけれども、今日の話としてはここだと思のです。

つまり、今、こういう不登校の人たち、中退の人たちがいっぱい出てしまう高校があったときに、我々、支援のフォーマットもつくったのです。もちろん、実際にやっているのは都の方々なのです。都の教育委員会や生涯学習課というところの方々がやっているのですが、支援チームというものをつくったのです。ここにスクールソーシャルワーカーを大幅に入れたのです。

これはすごく大事なところだったと思います。やはりスクールカウンセラーだけではちょっと足りない。つまり、今、言ったような問題はソーシャルワーカーが掘り起こしてもらわないとわからないことでした。家庭の情報は学校では全くとれませんので、個人情報保護もありますから、ソーシャルワーカーの方にいろいろ聞き取りしていただいたりして確認しているのです。それで、家庭状況が厳しい人たちは、さっき言った、朝、起こしてくれないみたいなことの中でどうやって通学を促進していくかということを工夫する必要があります。こういう支援チームというものをつくって、ソーシャルワーカーを入れたのです。

さらに言うと、今は高校の全てのところで発達障害を不安がる先生たちがめちゃくちゃ多いので、発達障害だからこういう子が出ているのだという声が出るので、今、全員で発達障害検査というものをやってもらっているのです。これは発達障害の疑いというものを一回払拭するためです。発達障害のせいにして教育をやめてしまう先生もいらっしゃるから、それは本末転倒だということを言って、まず確認作業を、例えば東大の精神科の教室の方に全員診てもらったりして、可能性がありそうだという人を、大体15%ぐらいなのですけれども、そういう人を先に診てもらったりして、アセスメントを正確にやってもらったり、援助が必要な人たちが、本当に援助が必要かという確認をしています。実際は、その15%で来られた人のほとんどは全然問題なく卒業していくのです。だから、そんなに問題なわけではないのですけれども、先生たちが心配してしまうので、そういうことをやってもらったりしています。

それから、そこで例えば家庭環境とかのほうに問題があるとかがはっきりわかったら、インテークという見立てをやってもらっています。やはり家庭に対しての援助が必要だということになれば、家庭への情報提供を積極的にしてもらおう。わかったことは、東京の場合なんかは親御さんが外国人の方だったりして、日本語のいろいろな文書が何も読めてい

なかったとか、就学支援のお金をもらう書類が全く書けない人たちであったとか、そういうこともやはりぼろぼろ出てきてしまうのです。ですから、やはりこれは見立てをして、色々なインテークをして、いろいろな連携のやり方を考える必要がありますし、もっと発達障害みたいなものがはっきりするなら、病院とかとの連携も当然必要でしょうし、福祉事務所との連携も特にやっているのです。

正直に言いまして、中途退学者は貧困層が多いということはさっきのデータでもわかってきましたから、今、そこへ特化した色々な支援をしているということです。つまり、こういう作業を、学校を核として、ネットワーク組織化してやるという作業をしています。あくまで学校は入り口で、学校に色々なコーディネートして下さる先生を1人置いていただいて、その窓口だけつくって、あとはリファーして、相手方を見つけて、そこで色々なことをしていただくというやり方をとっています。

これは結構、うまくいっているケースがあります。やはりさっき言いましたように、問題の本質を見られずに、ただやめてしまう人はだめな人だよねみたいになってしまうことがなくなりました。つまり、やめてしまう人は環境が悪いのではないのかということをもみんなが考えるようになってきて、やはり環境が悪いものを無理にただやれ、努力しろだけではいけないこともみんなわかってきたので、その環境のところの改善にこういうネットワーク組織を使っていくという考えにだんだんなってきた。

ですから、社会参加とか社会関係をつくるための資源を子供が獲得できるようにしていこうということはみんな考えるようになってきています。これはやはり非常に大きな変化だと思えます。

特に、繰り返しますけれども、退学する人が多く出る学校は、交通の便が悪かったり、あるいは先輩にも退学する人が多かったりして、そういう流れがついてしまっている場が多いですから、こういうところに資源を投下することで改善が結構図られてきているようです。

もちろん、人だけの問題ではないです。繰り返しますけれども、その人がリファーをするという、次を探すという、しかも優先的に、まず、このリファーをやらなければという、例えば病院が先なのか、福祉事務所が先なのかを、やはりインテークの結果として探ることをできているということは非常に大きな影響がある。

ただ、学校だけの問題ではないです。最初にお話しした「若ナビ」みたいに、相談窓口もこれができるわけですから、同じような機能を果たしたいのですけれども、残念ながら「若ナビ」もまだまだ認知度が低いのです。やはり情報の提供をもうちょっと工夫しないと、若い人たちがわからないのです。実際、幾ら「若ナビ」がありますといっても、まだアクセス数が増大していないのです。やはりうまく、さっき言ったアプリを入れるとか、高校に入学したら、すぐアプリを入れさせて、そこで使えるようにするとか、何かしなないとなかなか使ってもらいにくい。やはり学校になってしまっているのは、学校が毎日行く身近な場所として、まず少なくとも存在してきたからなのです。そういうことで、こ

こは工夫が要るところかなと思うのです。

それです、この図に描いてあるような、こういう連携組織が、これはあくまで学校を軸とした、中退者用ですけれども、中退予防みたいなものも含めた、こういう連携組織ができています。支援チームとか、そう言われるようなものが入って行って、こういう下にあるような関係諸機関がここへ関わって行って、ケース会議も始まっています。やはり関係の、特に実務をやっておられる中堅的な職員の方に来ていただいて、色々な課題を話し合う機会もここでできるようになってきているので、そういう意味では支援をする人たち同士の間関係も顔が見えるものにだんだんできていくところがあります。

繰り返しますけれども、これは中退が、勉強が嫌いで学校に不適応な人と決めつけてしまっていたら起きないことだった。問題の質を読み替えることでできるようになってきた作業であると理解していただきたい。中退する人は学校が嫌いではないよね、学校へ行く環境がないのだよねと思うことで始まってきたということです。

もう時間がないので最後にしますが、こういう考え方は今までの組織を、学校なら学校、相談機関なら相談機関を「閉じた組織」として考える考え方を、ちょっとずつですけれども、変え始めていると思うのです。

特に、私は「ネットワーク組織」という言葉が好きなのです。これはアメリカではよく使っている言葉で、組織というものを単体として見ない。そもそもがつながり合っている、関係しているものとして見る。例えば、学校はどんなネットワークを持って教育活動をしていますか。例えば、進路指導で中学校の先生と関係を持って、中学から子供が来ますねとか、健康診断を医療機関がやっていますねみたいに、関係のほうから学校を見るという思想をネットワーク組織といいます。このネットワーク組織をやることで組織を単体として捉えるのではなくて、関係の束の中から見ようとしています。

これは、実はずっとお話ししておわかりだと思のですが、子供同士の間関係も個人というものを強く考えた途端に破綻していく。個人と個人の間関係を改善すると考え始めることが重要です。この組織も、組織と組織の間関係を調整し、その組織の持っている有益性をより以上に出させる作業がないと余り意味がないときもある。

よく「創発特性」というのですけれども、こうやって関わり合いを見ていくと、医療機関はこういう価値があるのだとか、学校はこんな価値があるのだとか、逆に持っている専門性を特化して我々は見えていくことができるようになります。つまり、関係しているお互いの関わり合いの中から、その組織の意義を見出すことができるようになるのです。

こういうふうな、つまりネットワークとして組織を見始めると、今まで組織というものの持っている、つまり命令系統があって、偉い人がいて、下に末端の下位職員がいて働くというイメージが変わっていきます。

特に一つ重要なことは、相互のコミュニケーションや、アドバイスや、その関係している人の持ってきた過去の経歴・キャリアとかが役に立つのだということがすごくわかってきます。これは今までどちらかといいますと、地位で考えていました。偉い人、偉くない

人で、中堅の人、ベテランの人がいます。そのことばかり考えてきましたが、そうではなくて、やってくる人にとってコミュニケーションができたり、アドバイスができたり、自分の持っているキャリアが役に立つかどうかで、この組織の役割を見るという、やってくる人にとって何の価値があるかと考えるということです。こういう考え方になります。

同時に、問題の対処の中で、自分たちが課題として、特徴としてやれることを見つける。あるいはその中で出せる資源や人材や情報をそういう関係の中から見出すということもここで起きてくるようになります。つまり、色々な人が問題を抱えてやってきたら、そのやってきた人の問題にどこまで関わり合い、絡み合いながら対処していくかという思想で組織のできることを考えることになっていくわけです。

これは、こういうことを思ってください。ビッグデータというものが最近はやります。人が色々な場所を行き交っていくのを、Suicaとかのデータからとって、人がどの場所で、どのくらい滞留して、誰と関わっているか、推測するという研究です。こういうものがビッグデータによるネットワーク分析なのです。これと似たような発想を持っていく必要がある。つまり、人はどこに行き、何をして滞留していくか。関わり合う人同士の関係をそこに探っていくことで、自分のところの役立ち方が見えてくる。こういう考え方です。人の移動のほうを先行させるということです。

やはり今までと考え方を変えていきたいと思うのです。そうすることで、私は連携という以上に、そもそも、組織はネットワークの中で役に立つということをみんなが考えられるようになるのではないかなと思っています。最初にお話しした東京都の色々な相談体制なんかも、こういう発想をできるだけ組み込みながらやっていったということです。

実は、今みたいな話は若い人たちが高校を卒業したり、大学を卒業してから、また10年とか15年とか長いスパンで続くので、色々な場所でやらなければいけないことになります。そういう意味で、「ライフコース」ということを頭に描く必要があるので、この点も今日はちょっとお話しできませんでしたが、ずっと時間経過ということも考えてみたらいいのではないかな。

それから、非行少年の例も最後にちょっと出ているのですが、非行の人たちも実は人間関係の影響がすごく大きくて、例えば非行の人たちの再犯、もう一回やってしまう率は少年院への親の面会回数と反比例するということが知られています。少年院に面会する親がいると反比例して、再犯率が下がると言われているのです。だから、こういうものもやはり関係性こそが人を育てる証拠なのです。

これは別にすごく親和的ではなくてもいいのです。関わりというものが失われることが物すごく大きな喪失です。だから質も、関わりの質が濃厚だとか、すごく充実しているところまで行かなくていいから、関わる回路を切らないという、排除して切断してしまわないことがとても大事だということを示しています。

ちなみに、卒業生への調査を10年やってわかりました。最初の年、「同窓会だからみんな来てね、インタビューするから」と言いました。誰も来ませんでした。高校の求心力は

何もなかった。だけれども、そのとき、子供に言われたのです。「先生、だめだよ。『来なさい』と言っちゃ。調査なら5,000円出せよ」と言われました。それから私はボーナスを投下して5,000円をつくっていくようになりました。

しかし、そのことは、私はすごくよくわかることだった。つまり、私は顧客を見ていなかった。顧客というものがどんな人たちなのか。その人たちの顧客としての質を見て、手の打ち方を変えるべきだった。ところが、善意と学校文化でやってきて、そういう人たちに来てくださいとやっていた。なかなか参加してもらえなかった。ということは、宣伝の仕方、PRの仕方、来てもらい方、色々工夫の仕方が、顧客である本人たちから聞くべきことがいっぱいあるのではないかと。ここはすごく大事だと思いました。

これで今日のお話は全部で終わりです。聞いていて眠くなってしまったという方もいらっしゃるかと思います。申し訳ありません。まとまらない話をしてしまいました。

ただ、ここでずっと言いたかったことは、実は一貫していると思います。人と人が関わっていくことで色々な疎外や排除が防げるということです。社会に参加するためには人と関わらなければダメなので、この関わりの回路をいかに残していくか、つくっていくかということはものすごく重要になってしまう。このところを、つまりすごく親しく関わらなければいけないとかではないのです。関わる場や人がどれだけ多くの問題や困難を抱えた子供たちにあるか、若者たちにあるかということが重要なので、そこを意識しながら作業をしていくことが今、求められているのではないかなということです。

今までの本人が改善されるという思想ではない。本人が関われる状況をつくるということ。ここがすごく重要ではないでしょうか。また、内閣府がやろうとしている施策もそういうことなのではないかと私は思っているのですけれども、どうでしょうか。

では、長い話になりましたが、ここでお話を終わりにします。どうもありがとうございました。

質 疑 応 答

司会 ありがとうございます。

それでは、まだもう少しだけ時間がございますので、会場のほうから1～2問、質問があれば受け付けたいと思いますが、御質問のある方はいらっしゃいますでしょうか。ぜひ、この機会に。

では、どうぞ。

質問者1 貴重なお話、ありがとうございます。

いただいている資料にいくつも統計データとかが載っているのですが、出典が書いてあるものもいくつかあって、お話を持ち帰るに当たって、そのデータが、母数がどういふふうにとられているとか、調査の仕方とかをどこかインターネットとかで、それぞれ追えるようになっているかどうかというのをお聞きしたいです。

古賀氏 わかりました。

一番最後のところに<講演者の文献>というものがあまして、そこにフリーでダウンロードできる文献が多くあります。大学なんかは大学のサイトに入っただくとフリーダウンロードできたり、あとは、サイニーは御存じでしょうか。サイニーといいまして、「CiNii」と書くのですけれども、そういう学术论文がダウンロードできるサイトがあって、そこでダウンロードできるものもあります。ですので、中央大学の『教育学論集』なんかはそういうところからダウンロードできます。

あと、内閣府のほうで、数字が正しくないの、ちょっと直していただいたりしているところもあったようなので、私のもとのものと数字が微妙に、0.1%違っていたりというものもありそうなので、そこはまた頭に入れていただければと思います。そんなお話でよろしいでしょうか。大丈夫ですか。

質問者1 はい。

司会 ほかにございますでしょうか。よろしいですか。

閉 会

司会 それでは、時間になりましたので、第1回の「青少年問題調査研究会」については、この辺で終わりにしたいと思います。最後にもう一度、古賀先生に拍手をお願いできればと思います。

古賀氏 どうもありがとうございました。長い時間、ありがとうございました。

司会 それでは、調査研究会は以上で終わりにいたします。どうもありがとうございました。